

## 名古屋大学医学部・医学系研究科外部評価委員会

## －外部評価書（大学院教育）－

慶應義塾大学医学部 教授  
岡田 保典

## 1 総合評価

全体として充実した大学院教育が実施されていると判断される。博士課程では出来る限り高いインパクトの論文発表を求めるといふ、教員側の意向のもとに大学院教育が実施されている。博士課程修了時までの学位授与率が40%台とやや低くなっているが、安易な妥協をせず、優れた研究を完遂できる研究者を養成するという見識を評価したい。修士課程の医療行政学コース Young Leaders' Program は特徴のあるユニークな課程で、アジア諸国をはじめとした世界各国における医療行政指導者の育成に大きく貢献しており、高く評価される。医科学専攻の修士課程は、全国の大学で共通した問題を抱えており、リーディング大学院プログラムへのジョイントなどで今後再活性化されることを期待したい。

## 2 個別の項目に関する評価

## (1) 医学系研究科の教育目的、基本方針及び特徴

名古屋大学学術憲章に則り、「科学的論理性と倫理性・人間性に富み、豊かな創造力・独創性と使命感を持って医学研究及び医療を推進する人を育てる」ことを教育目的に掲げている。このため、博士課程（入学定員161名）は、平成25年度より基礎医学領域・臨床医学領域・統合医薬学領域からなる単一専攻である総合医学専攻に改組し、医学系研究科の実体に合わせて運営されている。医学研究科の方針として、プレマチュアな研究で満足せず、よりインパクトの高い研究論文を仕上げて学位を授与するとの姿勢が強く、印象的であり、かつ見識として評価したい。修士課程は医科学専攻（入学定員20名）と医療行政学コース Young Leaders' Program (YLP)（入学定員10名）から構成されており、YLPのコースはアジア地区を中心とした医療行政専門家育成の特徴ある課程であり、これまでの実績から高く評価される。

## (2) 教育の実施体制および教育内容と方法

博士課程に関しては平成18年から平成24年まで100%以上の定員充足率を維持しており、修士課程（医科学専攻）は薬学部6学年制課程の開始に伴って一時期65%にまで落ち込んだが、現在では100%以上の充足率に回復している。修士課程には医療行政学コース YLP があり、アジア諸国を中心とした世界各国における医療行政の指導者育成に大きく貢献しており、この修士課程コースを持つことは、本研究科に優位性を与えている。

博士課程においては、共通（基礎）科目として、基盤医学特論と基盤医学実習により、最先端医学研究の紹介と実験手技のためのトレーニングを実施している。これらの教育科目は、良く考えられた方法であり、平成24年度の開講数は基盤医学特論と基盤医学実

習がそれぞれ 168 回と 67 回と十分な回数が開講されている。学外講師への特論講演依頼では難しいかもしれないが、講演の英語化率が 30% 台である点は国際化が進む今日としてはやや低く、今後改善が望まれる。修士課程 YLP では、学生の選考過程で教員が現地に出向き面接するなど最大限の努力を払っており、1 年間の短い修学期間内に単位の取得と学位論文の作成を行い、英文原著論文発表が 44% に達している点など、きわめて高く評価される。一方、修士課程（医科学専攻）は、原則として博士課程に進学することを前提として修士課程 2 年・博士課程 4 年の一貫教育を行っているが、博士課程への進学率が 3 分の 1 に留まっている。このことは他大学の医科修士課程でも共通してみられる問題であるが、今後改善の余地がある。理工系大学では前後期 5 年間で修了することを考えると、効率的な一貫教育により修士課程 2 年・博士課程 3 年の 5 年コースの設定なども必要かもしれない。

### （3）学業の成果および進路・就職の状況

大学院生は、平成 16 年-23 年の 8 年間で 1940 報の論文と 4790 報の学会発表を行っており、76 件の受賞を受けたとのことであり、かなりの研究成果と評価される。博士課程学生の学位授与率は 70-80% である一方で、課程内の 4 年間での授与率は近年では 40% 台で 5 割を切っている。本研究科では、ブレマチュアな段階で論文を書かせず、よりインパクトの高い研究として仕上げから論文発表と学位申請しているためとの説明であった。一定の見識と判断されるが、優れた論文発表による課程期間内での授与率向上を目指した取り組みも必要と考えられる。修士課程 YLP 修了者は、アジア地区を中心に政府機関の要職について活躍している人材を多数輩出しており、きわめて高く評価される。修士課程（医科学専攻）では、博士課程への進学率向上は必ずしも簡単ではないが、最終的に就職率が 100% であり、優秀な研究者に成長した人材も出ていることから、評価される。

### （4）将来への展望

博士課程では、医師学生の博士課程入学が卒後 8 年時にピークをもっており、入学時の高齢化が問題の一つとされている。解決策として、MD/PhD コース（実績 2 名）、卒直後コース（実績 7 名）、基礎医学系研究者養成コース、次世代医学研究者養成コースを設けて研究者育成に努めており、いずれにおいても奨学金を付与することで経済的なサポートを行っている。設定・実施から歴史が浅く、これらコースの効果は判定できないが、がんプロフェッショナル養成基盤推進プランなども同時に進行しており、これらが総合的に機能してより多くの研究者育成が進むことを期待している。MD/PhD コースについては、エリートコースであるとの認識度を上げることでブランド化することが必須であり、全国の医学部での共通した課題と思われる。

（所 属） 慶應義塾大学医学部

（氏 名） 岡田保典